「中小企業活力増強のための IT サービス・レシピ」作成によせて

一般社団法人クラウドサービス推進機構　理事長　松島桂樹
（日本商工会議所 IoT 活用専門委員会タスクフォース座長）

前回（平成 28 年度補正予算）の IT 導入補助金事業（100 億円）において、数多くのツールが登録され、選べない、違いがわからないという意見が多く提起されました。そこで、今回、日本商工会議所が中心となって、私たちも参加して、経営課題を解決するために、こんなツールを、このように活用して、こういう効果を発揮したらどうか、というレシピ(処方箋、献立表)案を作成しました。

ここでは、網羅的というよりも、重点的に取り組む経営課題を中心にまとめてみました。ご参考にしていただければと思います。今後、適宜更新いたします。ご意見をお聞かせください。

ツールの例示に際しては、当推進機構において、昨年度までクラウドサービス認定された優れもののサービスを参照しました。5 月から今年度の認定の応募が開始されます。IT 導入補助金のツールに登録するとともに、クラウドサービス認定という第三者の認定を有効な道具としてご活用ください。

中小企業の IT 導入には、「事例」、「ツール・レシピ」、「支援体制」、いわゆる 3 点セットが有効です。よく考えてみれば、新しければ新しいほど事例などあるはずがないのです。でも事例を知りたがります。いわばないものねだりなのです。しかし、言葉だけでなく、実務でどう使えるかの具体的なイメージづくりには事例が有効であることも間違いありません。したがって、完成でなくても、進行中であっても紹介する意義があります。よく失敗事例を知りたいという意見があります。これもないものねだりです。失敗というのは期待と実際が異なっている、のであって、その多くは IT の問題ではなく実施する組織や人の問題です。であれば、同じようなことはどこにでも起こるはずで、しかし、それはその会社特定のことなので、実際には聞かなくてもわかっていることです。なんの役にも立ちません。努力してうまくいった、あるいはうまくいきそうな事例こそ聞く価値があります。

また、ツールありきではない、業務の改善が先だ、という意見も少なくありません。これももっともに思えますが、それは真っ暗なトンネルの中で、無謀に歩くようなものです。実際にこのツールが使えそうだ、ということを提示されることで改善イメージができるものです。

支援はもっと難しいです。「教えてもらう」と言うのと、「一緒に考える」は大違いです。教えてもらった知識は時間がたつと忘れます。自分で獲得した知識は忘れません。支援者が来なくなると、進まないという導入がかなりあります。支援者の最大の役割は、自分が来なくても、中小企業が自力で導入を進められるように、人材育成することです。

このように、今の IT 導入は大きく変わってきました。専門家も勉強しなくては中小企業経営者と正面から向かえなくなってきています。知らないことは知ればいいのです。知ら

ないことを知らないというのが一番不幸です。このレシピ集は、おそらく多くの専門家でさえ知らないツールがたくさんあります。まず知らないツールを知り、今の技術レベルに真摯に感動することです。その感動を中小企業経営者に伝えること、もはや支援専門家の一番大事で必須な能力です。

日本商工会議所では NTT 東日本・西日本等と共催で、「中小企業経営活力プラス実践塾」「ミニセミナー」を、全国で開催中です。

当推進機構もお手伝いしていますので、各地でのご要望がありましたら、ぜひ、お寄せください。出来るだけお応えしたいと思います。